慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ： 他者を理解するということ
Sub Title	Life-History Mandala workshop : meaning of understanding each other
Author	三田地, 真実(Mitachi, Mami)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2019
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.142 (2019. 3) ,p.187- 219
JaLC DOI	
Abstract	The "Life-History Mandala" workshop had started in 2010 with a goal to understand one's own and others' histories by using the Mandala chart, and later it has developed for the establishment of Kyosei Society. The "Life-History Mandala" chart is composed of inner circle and outer quadrants, and participants are asked to look back on their lives and fill their histories in quadrants and then their life key word (s) in the circle. The workshop has four sections: In the first section, the goal and schedule of the workshop are introduced to participants. In the second section, participants are asked to complete the chart. In the third section, they present their own life histories in small groups. In the last section, all participants share their experience during the small group session. The workshop has been implemented for various populations and places including foreign countries, and most of reflections from participants showed positive aspects of the workshop. Recently, the workshop has been extended by other professionals in other fields, particularly in the field of interpersonal help, because it can be used to understand clients as well as care givers themselves. There seems another possibility to expand the meanings and purpose of the workshop.
Notes	特集：坂上貴之教授 退職記念号 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000142-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ

――他者を理解するということ――

三田地　真実*

Life-History Mandala Workshop:

Meaning of Understanding Each Other

Mami Mitachi

The "Life-History Mandala" workshop had started in 2010 with a goal to understand one's own and others' histories by using the Mandala chart, and later it has developed for the establishment of *Kyosei** Society. The "Life-History Mandala" chart is composed of inner circle and outer quadrants, and participants are asked to look back on their lives and fill their histories in quadrants and then their life key word(s) in the circle. The workshop has four sections: In the first section, the goal and schedule of the workshop are introduced to participants. In the second section, participants are asked to complete the chart. In the third section, they present their own life histories in small groups. In the last section, all participants share their experience during the small group session. The workshop has been implemented for various populations and places including foreign countries, and most of reflections from participants showed positive aspects of the workshop.

Recently, the workshop has been extended by other professionals in other fields, particularly in the field of interpersonal help, because it can be used to understand clients as well as care givers themselves. There seems another possibility to expand the meanings and purpose of the workshop.

(**Kyosei* is a Japanese term meaning "co-existing".)

* 星槎大学

1. はじめに―等しく与えられているもの―

“There is a story.”（人に物語あり）

これは『傷ついた物語の語り手』の著者であるアーサーフランク氏がとある講演会の冒頭で述べられた言葉である．この本は，病を患った人々の語りをテーマにしたものであるが，病気の患者さんだけではなく，我々は等しく自らの物語を織り織り成しながらこの人生を生きている．しかし，日々の生活の中で「誰もが人生の物語を生きている」という視点は案外忘れ去られがちなのではないだろうか．自分の目の前に次々に現れては消える人々―それは職場の同僚のようにかなり頻繁に会う人であっても，ふらっと立ち寄ったコンビニ店のレジの人であっても―の一人一人に「長いストーリー」がある，ということをどれだけ踏まえてその人とのやりとりを理解し，味わっているだろうか．そのような長い時間の視点からの洞察なしに，他者とのやりとりを行うと途端に「あいつは，ダメな奴だ」とか「あの人は礼儀作用がなってない」という小さな不満・怒りが我々の中に沸き起こってくることがあるであろう．このような「決めつけ」が火種となってさらに大きなトラブルに発展し，「人間関係」をギクシャクしたものにしていくことはおそらく誰もが容易に想像できよう．

「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」は，この「当たり前」だが「普段見落とされがちな」「自分の目の前に居る人のストーリー」を思い起こすこと，そしてそれを基に他者を理解すること，すなわち他者の行動を理解することを狙いとして生み出された「場」である．今回，坂上貴之先生の退官記念号となる三田哲学に寄稿させていただくというおそらく筆者の人生には二度と巡っては来ないであろう機会に何をテーマに選ぶか散々迷った挙句，やはり自分自身が今一番大事だと考えていること，かつ行動分析家としての坂上先生からの教えがその根底に流れていることから，こ

の「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」を取り上げさせていただくこととした．以下，プログラムの基本構成，これまでの実践研究の経過と理論背景，及び発展の可能性について述べていく．

2.「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」の基本構成

本ワークショップの基本構成をプログラムデザイン曼荼羅（中野，2003）[1]で示した（図1）．この曼荼羅では真ん中の円にその場のゴール，つまりその場に参加した参加者がこうなっているという目指す目的を記述する．本ワークショップのゴールは，「他者を理解するということ」である．もう少し具体的にこのゴールを説明すると，「今，目の前に居る人がなぜそのように振舞っているのかを，その人のヒストリーから理解する」ということである．

さらに曼荼羅は四事象に分かれており，それぞれに起承転結（プログラムはこの順番で進む）というパートとなっている．大まかなプログラムは以下の通りである．

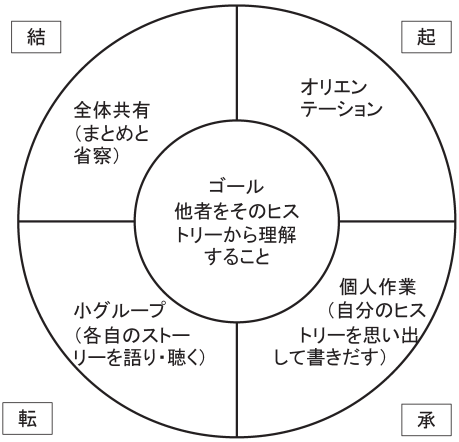

図1　ライフヒストリー曼荼羅ワークショップのプログラムデザイン曼荼羅

【起】オリエンテーション（ゴールやスケジュールの確認，ファシリテーターやスタッフの紹介，参加者同士の簡単な自己紹介など）
【承】個人作業でライフヒストリー曼荼羅フォームに各人の人生を思い出して書く
【転】小グループになって各人の人生を語り，聴き合う
【結】ワークショップの感想などを共有するクロージング

骨格となる活動は，【承】の個人作業と，【転】の小グループで聴く・語るパートという至ってシンプルなプログラムである．以下ではこの核となる【承】と【転】の進め方について詳細を記す．

【承】個人作業のパート

【承】の個人作業のパートでは，ライフヒストリー曼荼羅フォーム（図2）に自らの人生を思い出して書いていく．この際のインストラクションとしては，以下のような内容を含めている．

・自己開示セッションではないので，後ほどの小グループの際に他の人に言いたくないことは書かなくてよい．
・12時の場所が生まれた地点，右回りに時間を進めて，再び12時のところに来た時点が「今ここ」である．「今ここ」は固定点ではなく，流動しているので，点線で示してある．
・フォームの起承転結を区切る線のところは，何か人生の転換と言えるような出来事をトレースしてみる．時計ではないので，それぞれの事象の時間の長さは同じでなくてよい．
・どこから書いても構わない．（生まれたときから順を追ってでも，現在から遡ってでも，思い出すところからでもよい．）
・円の真ん中には自分の人生のキーワード（大事にしていること，信念，

繰り返し使っている言葉など）を書き込む．見つからなければそれでも構わない．

個人作業に費やす時間は，15〜30分程度である．実際の長さは全体のプログラムの時間配分の中で決定する．

【転】小グループのパート

【転】の小グループのパートでは，このフォームに各自が自分の人生を描いた後に，3〜4名で1グループになってお互いの人生の物語を語る・聴く活動を行う．この際のインストラクションは次の通りである．

・一人が個人作業で書き込んだ曼荼羅フォームを見せながら，最初から最後まで自分の人生を話し切る．聞き手は質問などを挟まずに聴き切ること．

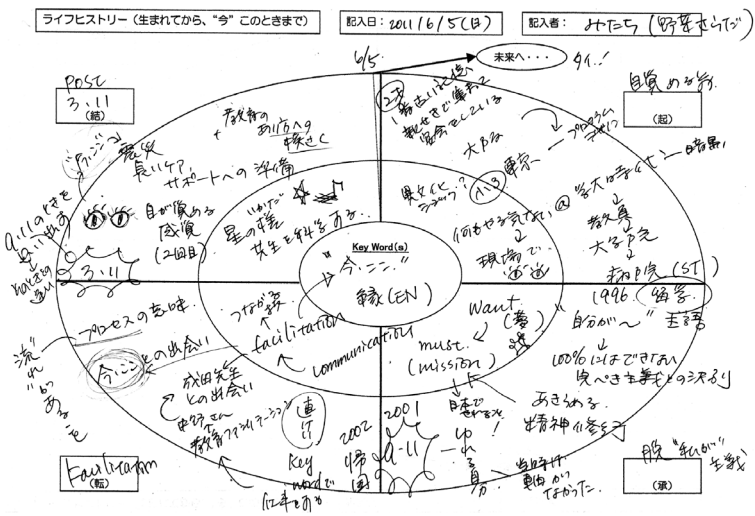

図2　ライフヒストリー曼荼羅フォーム（記入例）

・聴く側は，「100％話している人のためだけに生きているつもりで聴く」こと．
・グループ全員が話し終わったら，フリートークの時間とする．ここでは質問などをしてよい．

以上の小グループでの活動が終わったら，それぞれどのようなことを感じたか，それを書き留めたり，グループや全体で共有した後，ワークショップを終了する．

このようなシンプルなワークショップをこれまでに国内外で約 8 年半にわたって開催してきている．正確な数としては把握していないが，毎年 50～100 人前後が参加し，おそらく数百人はこれまでに本ワークショップを体験している．次節ではライフヒストリー曼荼羅ワークショップのライフヒストリーについて概略を述べる．

3. ライフヒストリー曼荼羅ワークショップの成り立ちとこれまで

3.1 誕生

ライフヒストリー曼荼羅ワークショップは，2010 年 3 月 29 日にこの世に誕生した（成田・三田地，2010）．東京学芸大学主催の学校マネジメントリーダー塾の研修プログラムの一つである「教師のキャリア支援と持続可能な学校文化の構築」セッション 90 分の枠を使って，学校管理職（校長，教頭，副校長など）を対象にした研修を企画することになったのである．東京学芸大学教授（当時）の成田喜一郎氏と筆者で打ち合わせをする中，両者が共に普段から愛用している，前述した「プログラムデザイン曼荼羅」を「個々人の人生を描くのに使えないだろうか」というアイデアが湧き出てきたのである．これは，元々成田氏が授業の中で行っていた活動を元にしている。未来を描くためのツールである「プログラムデザイン曼

茶羅」を今度は，過去を描くために使うことにした訳である．

学校経営についてのハウツーを学ぼうと期待で研修を受講していたかもしれない，学校管理職に向かって，この曼荼羅のフォームを配布しやり方を説明する際には「皆にネガティブな反応はされないだろうか」と一抹の不安があったことは否めない．実際の参加者の反応は良好で，不安は見事に払拭された．自分の学校の教職員を真に理解すること，というワークショップのゴールは管理職の胸にも相応に響いたのかもしれない．

3.2　ライフヒストリー曼荼羅ワークショップのライフヒストリー曼荼羅

図3にライフヒストリー曼荼羅ワークショップの「ヒストリー（歴史）」をライフヒストリー曼荼羅で示した．このワークショップのキーワード（ゴールでもある）は，「他者を理解するということ」であるので，そのように書いてある．2010年3月に誕生してから，今までこのワークショップ自体どのような歩みを経てきているのか，個人の人生を描くのと同じよ

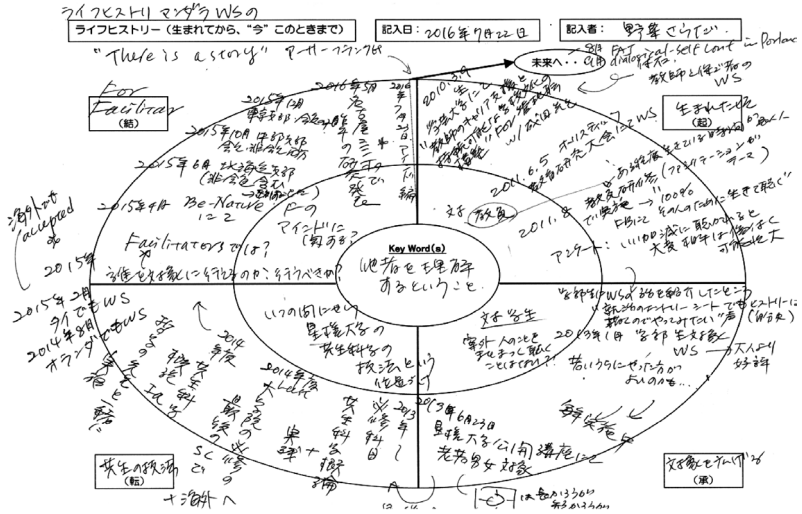

図3　ライフヒストリー曼荼羅ワークショップのライフヒストリー

うに折々のエピソードが時間の流れに沿って書かれている.

3.3　東日本大震災と共生

ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ誕生の翌年に当たる2011年，3月11日に東日本大震災が起きる．このとき社会全体が「支え合う」「絆」などというキーワードで包み込まれた.

この直後の4月に現在の本務校である星槎大学に着任，当時「共生」を目指す唯一の学部であった「共生科学部」の教員となり，自らの行える共生の実践とは何だろうかと考え始めた．比較的短時間で行える「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」が共生を目的とした他者理解を具現化するための「場」として位置づけられるではないかと実践を継続した.

2011年6月，ホリスティック教育研究大会にて，成田氏と二人でワークショップを開催し，ここでもライフヒストリー曼荼羅というツールを使って人生を見直すということ，各人の人生を小グループになってお互いに語るということの意味・意義を参加者から得ることができた（成田・三田地，2011）．その後はそれぞれにこのワークショップを実施，成田氏は特に学校の中でのワークショップの推進を図っている（成田，2017）.

3.4「100%語っている相手のためだけに生きているつもりで聴く」の重要性

筆者は自分のフィールドでもある，教員研修において本ワークショップを実施し，ここでも参加者からは大方としては良好な成果が得られた（三田地，2012）．しかし，ある研修の事後アンケートの中に「自分の話をしっかりと聴いてもらうことができなかった」というコメントを見つけたときに，小グループになって語り・聴くという活動の際に，聞き手側がしっかりと相手の話を聴いていない素振りをすることが話し手に及ぼす影響がいかに大きなものかに気付かされた．おそらく話し手は自分の人生を軽く扱われたように感じさせてしまうのではないかということである．それではなぜ，このようなコメントが出てきたのだろうか．そのときのワー

クショップのファシリテーターとしての自分の言動を思い起こして省察したところ，お互いの人生を語る際に，「100％その人のためだけに生きるつもりで相手の話を聞いてください」というインストラクションをそのコメントが出たときに限って明確に伝えていなかったのではないかということが原因として推測された（三田地，2012）．

この省察を踏まえて，その後のワークショップではこの「100％その人のためだけに…」のインストラクションは，パワーポイントなどで必ず可視化して文字としても提示することにしている．以後，同じようなコメントはアンケート上には見られていない．ワークショップを行う際にたった一つのインストラクションが如何に重要であるか，初期の段階で明確になった事例であった．

3.5　若い世代への拡張から異世代間での実施

このような人生を振り返るタイプのワークショップは，40代，50代位の人生をそれなりに生きてきた世代に適しており，20代位では早すぎるのではないかと当初は直観的に考えていた．しかし，本ワークショップを20代前後の学部の2〜4年生に紹介したところ，彼ら自身から「やってみたい」との申し出があり，以来ファシリテーションをテーマとした授業の最終回にワークショップを実施している（三田地，2014）．40〜50代の教員の結果と比べ，若い世代の方が本ワークショップへの意義を高く感じているという結果が得られている（図4）．具体的に，「十人十色，その人が成り立っている要素をたくさん知ることができ，これは相互理解に連結すると思いました」「それぞれの人生を聴くのは面白かった．普段聞けないことを聴けた」「表面だけでその人を理解することはできない．完璧に人を分かるのも不可能だと思うけれど足がかりになる．人の人生を知りたいと思うから．嫌いな人がいたとしても，その人にも過去がある」といった感想も聞かれており，「若い時代にこのようなワークショップをしっかりと行い，他者の行動をその人の人生から見直す視点を培う」ということ

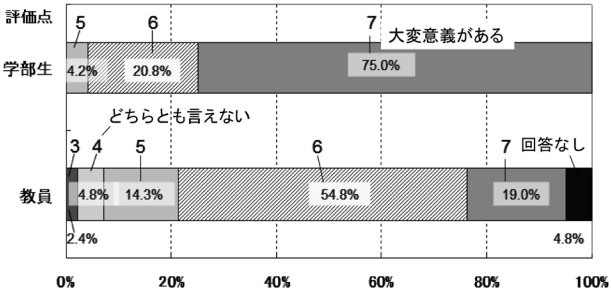

図 4　他の方の人生を伺う意義（三田地，2013）

が重要なのではないかということが示唆されている．

2013 年 6 月には星槎大学の公開講座「共生の技法」の一環として本ワークショップを実施，それまでは教員，あるいは学部生といったある種の等質集団（年齢，属性共に）を対象に行っていたワークショップを初めて 10 代から 80 代といった老若男女を対象に行った．よく見られるような「年表型」のフォームで人生を描きだすと 10 代と 80 代では圧倒的にその分量に差が出てしまい，それが一目瞭然になってしまうが，この曼荼羅フォームを使って描き出すと老いも若きもすべて「人生が曼荼羅フォーム一枚」に収まるということに気付かされた．誰の人生もフォーム一枚になることにより，「人生は皆等しい」というメッセージが伝えやすいのではないかと考えられた．

同年より，「共生科学概説」という星槎大学の必修科目を担当（2014 年度からは本学副学長，東大名誉教授で哲学者である山脇直司氏と共に担当）することになり，「共生を実現させるための具体的な技術」として本ワークショップを位置づけて導入した．まず授業の内で受講生同志で実践し，定期考査に当たる科目習得試験の一部として，学生自らが各自の現場でこのワークショップを実施してそのプロセスを省察し，レポートにまとめるという課題を出している．以来，2018 年度まで継続して行ってい

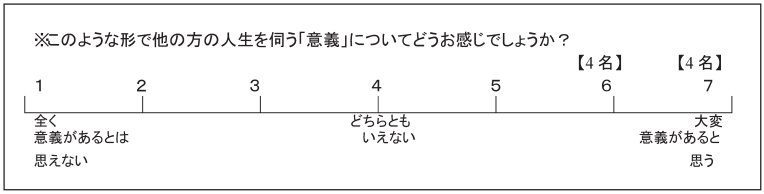

図5　他の人の人生を伺う「意義」について

る[2]．最終レポートで紹介される事例は様々であるが，特に身近な家族（父親，母親，兄弟）とこのワークショップを実施し，それまで知らなかった家族の一面を見ることができたという報告は多数なされている．

3.6　海外における反応

国内において，本ワークショップの共生のための技法としての意義が確認されてくるにつれ，このワークショップは海外でも認められるのだろうか，という素朴な疑問が沸き起こってくるようになった．

2014年8月に，オランダのハーグで開催された“Dialogical Self Conference”にて，このワークショップを海外で初めて実施する（三田地・中野・成田，2015）．ここでも，参加者8名のうち，「他者の人生を聴く意義」については，4名が「大変意義があると思う」（7点），残り4名が6点と高評価の回答であった（図5）．また，この学会では内なる自己との対話のツールとしての本曼荼羅フォームの可能性があるのではないかと推測された．

隔年開催の同学会において，2016年，2018年とこれまで本ワークショップを学会の趣旨に沿った形で改変しながら，3回実施してきている（Mitachi, Yamamoto, & Nakano, 2016; Mitachi, Yamamoto, & Sato, 2018）．毎回，各国の参加者から「自分の国で使ってよいか」というリクエストを受け，2018年には2016年に本ワークショップに参加したというアメリカ人参加者に偶然話を聞くことができ，自身の現場でこのワークショップを行っているということであった．いつの間にか世界で使われるようになるライフ

ヒストリー曼荼羅ワークショップなのであろうか.

3.7 誰がこのワークショップを受けるのか―ファシリテーターのためのトレーニングとしての位置付け―

他者を相手の立場に立って理解すること，本来ならば全ての人にこのワークショップを受けてそれを学んでもらうことができれば理想的であるが，現実にはそれは不可能であることもまた事実である．ライフヒストリー曼荼羅ワークショップを産み出して5年ほど実践を続けてきたときに「それでは，一体誰を対象にこのワークショップを企画すればよいのか」という問いが浮かんだ．そのときの一つの答えは「ファシリテーター」には必須ではないかということであった．ファシリテーターとはファシリテーションを行う人のことである．ファシリテーションとは，「促進する」「容易にする」の「Facilitate」の名詞形であり，狭義の意味では会議など人が集って話し合う場面が停滞しないように「促進する」ための技術を指す．広義には，授業や研修といった場面で学生は受講生の学びを促進するようにプログラムをデザインしたり実施したりするための技術としても捉えられている（中野・三田地，2013）.「教員にはファシリテーション能力が必要である」とは，アクティブ・ラーニング型授業の成否を語る際にはよく聞かれる文言である（中部地域大学グループ，2014）

ファシリテーションを行う際には，複数の人が集う場をマネジメントすることが求められる．例えば，話し合いの場であれば，「何も決まらないまま会議が終わる」「一人で長々と話を続ける人がいる」「誰かの意見ばかりが通る」「全然話をしない人がいる」「話し合いが迷走する」といった業界業種問わず共通にみられる「プロセス」の問題を解決するために，ファシリテーションの技術を使うのである．上記のような問題が起きると人間はややもすると「あの人がいるから会議がうまくいかない」といった「個人攻撃の罠」（島宗，2000）に陥りやすい．しかし，その思考になると「その問題となる人を排除すればうまくいくはずなのに」という排除の思

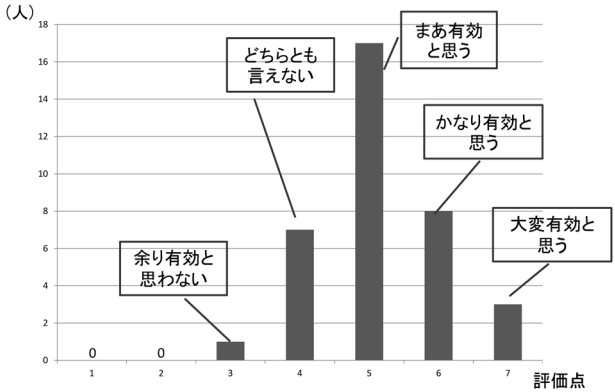

図6　ファシリテーターのマインドのトレーニングとしての有効性（三田地，2017）

考ループに入り込むことは必須で，ファシリテーションはそういう個人攻撃の罠から脱出するためのツールでもある．

また何故そのような行動をとるのか，問題となっているふるまいをしている参加者のことをその人のヒストリーから捉え直すことで，「排除」という方法ではなく，その人の立場から考えた問題の本質的な解決の糸口が見つかるかもしれない．そのためにも，相手のヒストリーから今のその人のあり様を理解するというライフヒストリー曼荼羅ワークショップで得られる視点がファシリテーターには重要ではないかと考えるに至った．

日本ファシリテーション協会というNPO法人として活動を続けているファシリテーターの定例会で本ワークショップを実施した結果，図6に示したように，このワークショップがファシリテーターのマインドのトレーニングとして有効という回答が77.8%から得られている（三田地，2017）．

3.8　曼荼羅と年表―どちらがヒストリーを描きやすいか―

筆者はこのワークショップを行う際に，常に曼荼羅フォームを使って人生を書き出してもらい，語り合う時間を設定してきていた．しかし，本当にこの曼荼羅フォームがこのワークショップに適しているのかどうかの検

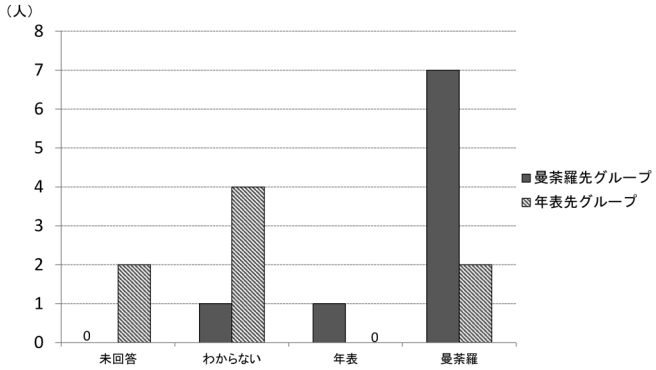

図 7　もう一度この WS を行うとしたら，どちらのフォームを選択するか？（三田地，2018）

証が必要ではないかと，2017 年に前述の日本ファシリテーション協会の定例会において，この検証を行った（三田地，2018）．参加者 18 名を二グループに分け，一つのグループは最初に曼荼羅フォームで人生を描き，その後に小グループで語る時間を持ち，次に年表型で人生を描き，その後に小グループで語る時間を持った．もう一方のグループは最初は年表型，次に曼荼羅フォームを使うという順序を逆にした形で行った．最後に，二つのフォームの相違点についてそれぞれに意見を出し合ってもらうという形を取った．この結果，再度同じワークショップを行うとしたら（自分のヒストリーを書きだし，語り合うというもの）どちらのフォームを使うかという質問に対しては，曼荼羅フォームを先に使ったグループも，年表型を先に使ったグループもいずれも「曼荼羅フォームを使う」という回答が大多数を占めている（図 7）．

表 1 には，参加者から出された意見として，それぞれのフォームの特徴を整理している．これによれば，年表型の方は，時系列で順番に事実を思い出していくときには使いやすく，一方，曼荼羅フォームの方はどこからでも書き出せるという自由度がメリットでもありデメリットでもあるこ

表1　曼荼羅フォームと年表型のメリットデメリット

	メリット	デメリット	特徴
曼荼羅フォーム	【書く】 ・自由度が高い（3） ・どこからでも書ける（2） ・関連性が見える（出来事間の） 【語る】 ・「気持ちの動き」はマンダラが話しやすかった ・4つの象限と内外の仕分けをしたら急に筆が進んだ ・自分でも余り自覚していなかったキーワードがみつかったので驚いた ・自分の軸を見つめ直せる	【書く】自由な枠のはずが最初から“枠組み”として存在しているので手が止まってしまった 【語る】 書いたものを見せながら話す場合，曼荼羅はぎっしり書かれていると見えにくい. テーマを起承転結に分けることで一つのストーリーができあがる．→伝えたいことを話せる	・曼荼羅の方が発想が自由 ・時間を行き来しながら書けたり，発見が多かったから，自由度が高い ・曼荼羅はナラティブ・ストーリー ・時間に沿った捉え方というより，意味やテーマに沿った捉え方ができそう
年表型	【書く】 ・何も考えずに時系列で書きやすかった ・年代やステージごとに何をやっていたのか，ヌケモレなく考えられた（2） 【語る】 ・「人生を語る」ということでは年表が話しやすかった ・書いたものを見せながら話す場合，年表の方が整理されていて見やすい	【書く】 単にストーリーの羅列で終わる 【語る】 ・一行が一つのイベントになっているため，曼荼羅よりも語りにくい. ・時系列ってやりにくいなーと思った（2） ・枠にはめなければならない ・ストーリー→できごとの順に発想するので，いきなりできごとは書きにくい ・時系列に沿って話せば良いが，途中の気づき転機は話しづらかった ・後で付け足せない	・年表は事実 ・時系列が大事であれば年表

と，ストーリーを作りやすいという意見があった.

4. 背景にある行動分析学の視点
―今の振る舞いは過去のヒストリーの賜物―

この節では，ライフヒストリー曼荼羅ワークショップの背景にある理論

としての行動分析学を概説し，その視点からワークショップで達成しようとしている狙いについて解説する．行動分析学とはアメリカの心理学者である，B.F. スキナーによって創設された学問分野である．その根源的な問いは「生物個体はなぜそのように振舞うのか」である．

4.1　日常的直観による行動の理由づけ

他者を理解するとはどういうことか．筆者はこれを「他者の行動を理解する」と読み替えている．相手の行動が理解できないとは，「なぜそのように振舞うのか」が理解できないということに他ならず，このように考えれば，行動分析学の問い「生物個体（含む人間）はなぜそのように振舞うのか」に答えられたときというのは，他者を理解できたということになる．実際，日々他者に向かい合うときに，以上のような点で「他者の行動を理解する」ことがどれだけできているだろうか．さらには，日常場面で人と人が衝突するときとはどのような場面であろうか．

おそらくそれは，「相手がなぜそのように振舞っているのか」を理解できず，無意識のうちに「攻撃したり非難・否定したりする」ことから始まっていくのではないかと推察している．日常的な場面の小さな諍いから，職場でのトラブル，果ては国際的な紛争まで，おそらく辿っていけばその根っこには，「相手とは価値観が合わない」「考え方が違う」ということがあるのではないだろうか．しかし，それは言い換えれば「相手がなぜそのように振舞っているのか，自分の価値観＝行動規範と照らし合わせると納得できない，理解できない」ということである．さらに他者の理由づけがかなり直観的に行われているということも事実である．

人は様々な形で他者の行動に理由づけをしている．仕事ができない部下に対して「やる気がないからだ」とか「意識が低いからだ」と言う，子どもにガミガミと叱ってばかりいる親に対して「怒りっぽいからだ」と言う，さらには子どもたちの問題行動に対しても「発達障害があるから，問題行動を起こしている」という表現が聞かれる．

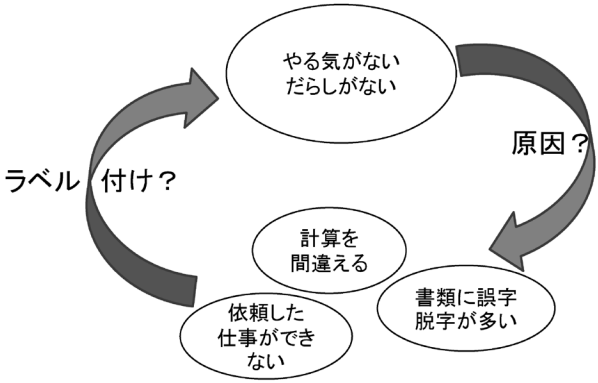

図8　循環論の図

行動分析学では，上記のいずれも適切な行動の理由づけとは判断されない．なぜなら，「やる気がない」「意識が低い」「怒りっぽい」という一見行動の理由のように見えるその理由付けになぜ至るのかと言えば，その人の様々な行動を見て，ラベル付けしているからと考えるからである．図8は，このことを図示したものである．「計算を間違えている」，「書類に誤字脱字が多い」，「依頼した仕事がその通りにできない」など，いくつものその人の振る舞いを総括して，「やる気がない」「だらしがない」とラベル付けしていることを示している．行動の理由になっていると思われている表現が，実はその人のいくつもの行動を総称した「ラベル」であるということは，どちらが本当の理由かわからないという意味でこのような理由づけは「循環論」と称される．

以上のような行動の理由づけを無意識に行っていると，次にはその問題を解決する策として，「やる気を出させよう」「意識を高めよう」「怒りっぽい性格を直そう」，そして「発達障害を治さなければ」という思考に至ることは容易に想像できよう．このような日常的な直観に基づく行動の理由づけを根拠にした対応の仕方は，行動分析学の視点からは全く的外れな

ものと判断される．

4.2　行動分析学の視点からの理由づけ

それでは，行動分析学の視点に基づく対応とはどのようなものであろうか．前述したように行動分析学の学問としての根源的な問いは「なぜ，生物個体はそのように行動するのか」であり，その問いに答えられたときというのは，「こうすればその行動が出現しやすくなる」「こうすればその行動は出現しにくくなる」ということが明確になったときである．そして，「こうすれば」のところには，本人の「意志」や「やる気」ではなく様々な環境要因が入ってくる．

今，なぜそのような行動をしているのか，それはその人が生まれてから様々な環境要因－これには，物理的な要因も人的な要因も含まれる―に曝されてきたからであり，それを端的に表現すると「行動は環境との相互作用によって形成されている」ということになる．このことをビジュー＆ベアー（1972）は次の式で示している．

$$B = f(E)$$　（ビジュー＆ベアー，1972, p. 12）

行動（B）は環境（E）の関数であるという意味である．坂上（2016）によれば，「行動分析学とは環境（刺激）と個体の行動（反応）の機能に注目した随伴性についての実験科学」（p. 380）であり，つまり，ある行動に随伴している環境を変えるとその行動がどのように変化するかを実験的に検証しようとすることが行動分析学の本質であるということである．

人間が今このような行動をとるのかということについて，スキナーの考えをオドノヒュー＆ファーガソン（2005）は次の3つのレベルで整理している．すなわち，自然淘汰のレベル，行動結果による淘汰，文化淘汰という3つのレベルである（図9）．第1のレベルである自然淘汰とは，何世代にも渡る系統的過去の経験によるものであり，そういう振る舞いをしていたものが生き残れたという生存の随伴性[3]によってもたらされた種固

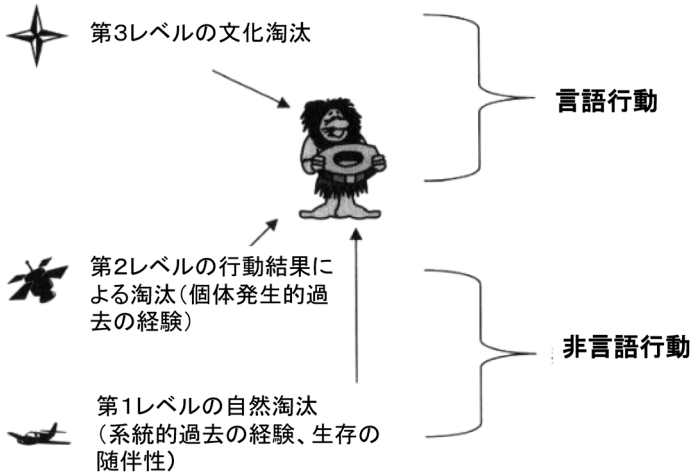

図 9　現在の行動を規定する 3 つのレベル
（出典：オドノヒューら，2005, p. 197）

有の身体構造に規定される行動というレベルである．例えば，人間が歩けるのは四つ足歩行ができる身体構造を持っているからであり，逆に空を飛んだり水中で長く生存したりすることはできないのはこの身体構造に規定されている．第３のレベルである文化淘汰とは，広い意味での言語共同体による行動の淘汰である．同じ身体構造を持つ人間であっても，言語行動には広い多様性が見られるのは，この文化淘汰によるものである．日本に生まれた子どもが日本語を話し出す，英語圏に生まれた子どもは英語を話し出すのはこの文化淘汰による．日本に生まれた子どもは日本語を話す言語共同体によって，日本語は強化され，それ以外は強化されない．周りの人々の反応によって，日本語に近い音を発話するように子どもの発話行動が淘汰されていくのである．

一方，同じ人間として生まれ，日本という同じ文化圏で育ったとしても，個々の人間の行動パターンは様々である．それはなぜか．その答えが，第２のレベルである「行動の結果による淘汰」である．これは，生ま

れてから個々の個体が自分の置かれた環境との相互作用によって，ある行動は強化されてその生起頻度を増し，あるいは維持し，別の行動は弱化されるということを繰り返す中で，現在各人が行うことのできる行動を獲得してきているということを示している．例えば，ある人はAという銘柄のコーヒーをよく飲むが，Bという銘柄のコーヒーは飲まない，別の人はその逆であるというのは，それぞれのコーヒーを飲む行動に伴う結果がそれぞれの人に及ぼす影響が異なるためだからである．

行動分析学の詳細については様々な成書を参照されたいが，この環境との相互作用ということがなかなか現実生活の場面では理解されず，あたかも「ある人がそのように振舞っているのは，その人自身に原因がある，つまりその人が悪い」という前述したような「個人攻撃の罠」（島宗，2000）の思考に陥りやすい．先の日常的直観による行動の理由づけはそのような行動の原因を個人の内部に求めるものであった．

一方，坂上（2014）は，「行動の制御要因」として，次の3つを挙げている．

1）遺伝的要因
2）個体の行動履歴
3）行動が出現したときの環境要因　（p. 508）

この3点はまさに「今この瞬間に」なぜ我々がその行動をしているのか，という問いに対する答えである．「遺伝的要因」とは，先のオドノヒューの図で言うところの「自然淘汰のレベル」に相当しよう．「個体の行動履歴」とは，過去にその個体の行動に対して存在していた随伴性の履歴であり，オドノヒューの図の第2のレベル「行動の結果による淘汰」に相当する．「行動が出現したときの環境要因」とは，「今その個体が曝されている環境状態」の中で生起されたという意味であり，例えば，上司を目の前にしている状況で「敬語を使う」，家族が目の前に居る状況「くだけ

た表現で話す」といった具合に，今産み出される行動は今現在の環境の中で曝されている刺激によるということを示している．

4.3　ライフヒストリー曼荼羅ワークショップで伝えようとすること

ライフヒストリー曼荼羅ワークショップは，オドノヒューらの第2のレベル「行動結果による淘汰」という視点（三田地，2013），また坂上の言う「個体の行動履歴」を数時間という短い時間で理解することを可能にするものとしても位置付けられている．目の人に居る人には長い環境との相互作用による，行動の履歴，つまりヒストリーがあり，その人が生まれてから今までにどのような経験を経て―どのような環境に曝されどのように変容してきたのか―今に至っているのかを理解することを狙っているのである．

出会った人々を「そのとき」の印象で判断せずに，またそのときの振る舞いを個人の気質や性格に帰することなく，その行動をもたらしている，その人の過去にある長いヒストリーが見え隠れすること，それを基にその人の行動を理解する視点を持つこと，それがライフヒストリー曼荼羅ワー

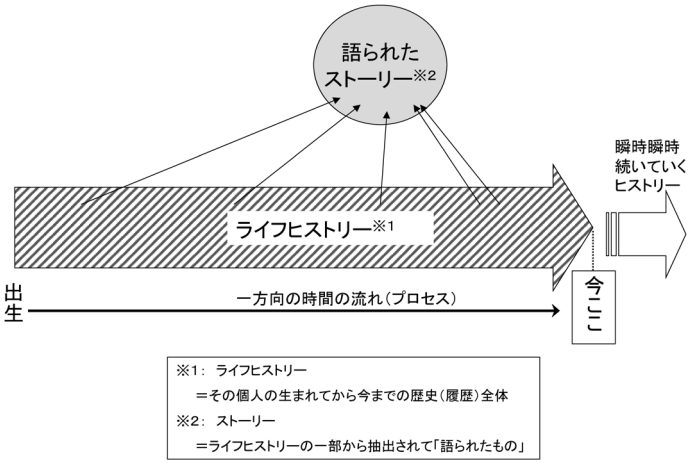

図10　ライフヒストリーとストーリーの位置付け（三田地，2013）

クショップの一番の狙いである．

ある人が実際に曝されてきた随伴性――一般的は経験と称されるようなもの――は，行動分析学では「行動の履歴（a history of behavior）」と呼ばれる．本ワークショップのタイトルを「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」としたのは，その人の「行動の履歴」を推測してその人の行動を理解しようという意図があるためである．生まれてから「今ここ」の時点までの各人が実際に体験した事柄は「ヒストリー」，ワークショップ内で語られる内容は，各人が先の「ヒストリー」からいくつかのエピソードを編集しなおした「ストーリー」であるとして明確に区別している（三田地，2013）．図 10 にこのことを示した．

本来ならば，しっかりと時間を費やして行動分析学を学び行動の原理を理解することが望ましいのではあるが，誰もがこの学問分野に本格的に取り組む環境に曝される確率は現状では相当低い．そこで，行動分析学のエッセンスを難しい言葉を使わず，かつそれほど多くの時間をかけず，さらに実際に目の前に居る人のヒストリーを理解するということを単に知識としてだけではなく，実際に他者のストーリーを聴くという能動的作業を通して実体験できるところに本ワークショップの意義があると考えている．

5. 意味が拡張するワークショップの実践

他者を理解すること，言い換えれば他者の行動を理解することを目的として開発，実践されてきたライフヒストリー曼荼羅ワークショップであったが，参加者が自分の曝されている環境文脈により，本来とは違う別の意味にこのワークショップの意味・意義を拡張するという動きがここ数年見られている．この節では，どのような現場でこのワークショップが活用されつつあるかということについて，簡単に紹介していきたい．

5.1 「自己理解」を目的としたワークショップへの拡張

まず，最初の拡張はワークショップの「個人作業」としての活動である「自分のライフストーリーを曼荼羅フォームに書き出す」という部分に対して生じた．ワークショップ本来の目的は「他者のストーリーをしっかり聴く」ことで他者の今に至る半生の存在を理解し，「だから今があるのだ」ということ，そういうヒストリーが今のその人の振る舞いを作っているということを理解してもらうことであった．ワークショップ前半の個人作業はそのための準備という位置づけであった．

しかし，参加者の中からこの個人作業が「自己理解につながる」「自己理解が深まる」というコメントが聞かれるようになった．また，「このような形で自分の人生を振り返ったことはなかった」というコメントもあり，後半の小グループでの共有の準備という位置づけを超えて，前半の個人作業自体に意味があるという意味づけが徐々になされてきている．

時折，「個人作業の部分は，ワークショップ以外の時間，例えば家で各自やってきても良いのでは」というコメントも受けるが，これについては敢えて限られた時間の中で参加者が同じ時間を使って曼荼羅フォームに書き込むという方式を崩さず取っている．その理由の一つとして，万が一参加者の一部の人がフォームに書き込んで来なかった場合，その参加者に書く時間を設定することが難しくなるという点が挙げられる．さらに，各自がワークショップの前に時間をかけてフォームに書くという場合，かける時間もまちまちになってしまう確率が高まり，ある人は緻密に書き込み，ある人はそうでもないとなった場合の濃度差とでもいうものが生まれる可能性があることも考えられる．

「決められた枠内で，ファシリテーターのインストラクションに則った範囲で書く」という同じ条件を担保するためにも，現在のところはワークショップ内で「個人作業」の時間を取るという形を維持している．

自己理解の方に比重を置いたワークショップとして，小グループの後に

さらにお互いにお互いのストーリーを聴いてどう感じたかをフィードバックし合った後，再度自分一人の時間を持ち，これまでの人生についての省察，これからの人生についての展望を考えるという時間を持つこともできよう．

場合によっては，曼荼羅フォームの9時の地点を「今ここ」に，12時の場所を「死」と設定して，第4事象をこれからの残りの人生の過ごし方を書くスペースとして使う方式もある．

5.2　看護・福祉・医療の領域での活用

看護・福祉・医療といった，患者さん，利用者さんといったある意味支援を要する人々と毎日関わりながら仕事をしている看護師，福祉施設の職員といった職業の方が「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップは患者理解，利用者理解として有効ではないか」と意味を読み取られて，ワークショップの依頼が舞い込むようになってきている．2017年度，本ワークショップを職員研修で行った福祉団体の主催者から，年度末に以下のようなメッセージを受け取っている．

> お陰様で，研修の狙いである自己理解と，利用者を理解することの重要性と大切さを実感することができたと考えております．
>
> 学びを活かしその後に取り組んだ課題においては，利用者を知ることに力を傾け，これまで以上に利用者との距離を縮めることができ，利用者との関係が深まるなど参加者全員が，手ごたえを感じたように思われます．

利用者・患者といった「ラベル」で相手を見て接するのではなく，目の前の利用者・患者にもそれまでの長いヒストリーがあって「今ここにいる」という当たり前のことを改めて思い起こし，相手の立場で相手のヒストリーが後ろに見える目を持ってその人に接することができるようになることは，表面上の接し方とはかなり違うものなのであろう．このような患

者理解・利用者理解のために本ワークショップを開催している看護師の仲間もおり，看護関係の雑誌において，元々のプログラム・デザイン・マンダラの開発者である，中野（2017）も本ワークショップの意義を紹介している．

この領域では，「まず看護師や職員自身が自己理解をすること，それから患者理解・利用者理解をすること」という個人作業と小グループでの語りの両方に重きが置かれた形での開催となっているようである．

5.3　教育ほかでの活用

元々，本ワークショップが生まれる発端であった，教育の領域において「教育課程・教育方法論という学部2年生対象の科目」の中で本ワークショップを実践しているという事例がある（金馬，2018）．学期の授業開始直後にこのライフヒストリー曼荼羅を作成し，自らの学習者として学ぶ意味を問い直している．

また，小学校6年生を対象とした図画工作科の授業内でその制作過程自体をライフヒストリー曼荼羅フォームで振り返り，児童同士で省察を行うという実践例も報告されている（立川，2014）．

さらに，日本語教育という文脈の中で「生と死を見つめ直す」デス・エデュケーションを扱う授業の中で，学生が自らの人生を省察するツールとしてこのライフヒストリー曼荼羅フォームを改変した形で使ってその実践を報告している（萩原，2014）．具体的には，曼荼羅フォームに書き込む内容を四事象のそれぞれについて「人」「もの／こと」「自分の考え方や頭の中」に分けて書かせるスタイルである．企画する側の意図次第で，このような発展形も可能性としてはあるだろう．

元々の開発者である成田氏も教員向けにこのワークショップを実践されていることは言うまでもない（成田，2017）．

5.4　オンラインワークショップでさらに広がる可能性―場所を超え，人をつなぐ―

このようなワークショップは，基本同じ場所に集って対面で実施するものであるが，オンラインのスタイルでの実施も既に何回か行っている（未発表）．オンラインワークショップには，Zoom というインターネット会議システムを活用しており，このシステムの強みは，最大 50 名がネットでつながることができ，かつ，必要に応じて小グループに分かれることができるということである[4]．例えば，18 名でワークショップをスタートし，小グループに分かれるというときには，3 名ずつの小部屋を 6 つ作ることができるのである．実際の参加者のコメントをいくつか紹介する．

- ✓ お互いの物理的な距離に縛られないでいろんな人と関われることが魅力．
- ✓ 普段会うことが困難な地域の方と繋がれるのはすばらしい．
- ✓ オフラインで初対面の人と話すより，親密に話すことができるものだと思った．
- ✓ 自宅なのですごくリラックスできました．

語義通り，時間だけ合わせることで，どこにいても参加できるというのはわざわざ会場に来るのが困難な人にも参加する機会を広げるという意味でも今後さらに活用していく場が広がるであろう．

これまで，「直接出会うことが難しいので，仕方なくネット会議で」という流れが対面ワークショップに慣れた者の間では無意識にあったことは否めない．しかし，インターネットを介してのワークショップの省察により，「ネット会議でなければ参加できない」という人々も世の中には多く存在することに気付かされた．例えば，子育て中で家を空けられない母親の立場の人々．人前に出るのが大変な人．やむを得ない理由で出かけるこ

とが大変な人々の中にも本ワークショップに参加したいと思う人が居た場合に，それを可能にするのがこのオンラインでの開催である．

もちろん，ネット会議システムを使えば，国内に限らず世界とつながることもできる．いずれ世界各地をつなぎ，「世界ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」を開催したいという願いも近い将来実現させたいと考えている．

6.「曼荼羅」の持つ意味　―仏教と行動分析学との接点―

ここまで「曼荼羅」という言葉を明確に定義することなく使ってきたが，そもそもこの「曼荼羅」というのは仏教の世界観を表す形として広く知られているものである．元々，プログラム・デザイン・マンダラ（中野，2003）を開発した中野によれば，「プログラムを企画立案する際に通常の進行表スタイルではなく，丸型にしたら一目で見られるのではないか，この形は曼荼羅ではないか」という流れでこの「マンダラ」という名称がつけられたということであり，そこに深い仏教的な意味を持つものではなかったようである．本ワークショップで使っているライフヒストリー曼荼羅のフォームも，ある意味そのままその名称を踏襲し，筆者の好みで「曼荼羅」と漢字表記をするようになった経緯がある．

しかし，この曼荼羅フォームに向き合うようになって彼此10年以上が過ぎた今改めて感じることは，やはりこの「形」そのものに何かの意味，あるいは力が潜んでいるのではないか，ということである．

曼荼羅で描くライフヒストリーは12時の地点で終わりではなく，らせん状になって，あたかも次の曼荼羅につながっていくように見える（図11）であろう．この連続性は，始めと終わりが明確に示される年表形式では描けない．このことは，始めは終わりである，つまりある者の死が次の生につながっているということを模式的に示しやすいのではないかと考えられる．

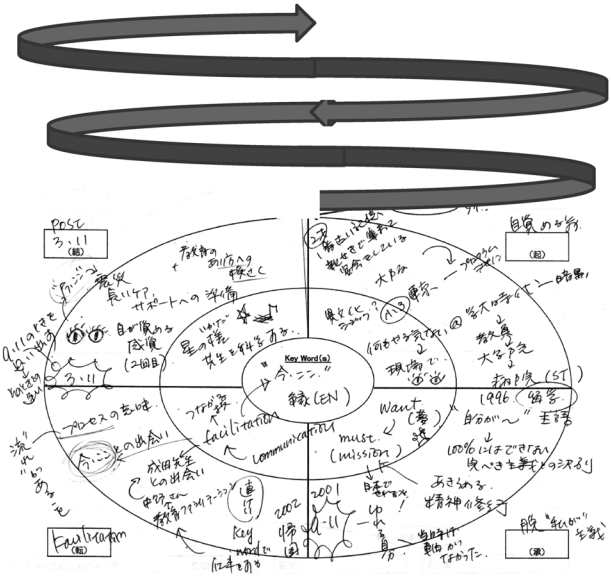

図 11　らせん状につながる曼荼羅フォーム（イメージ）

※杉の倒木から新しい杉が
　生まれている

図 12　屋久島杉の命の連鎖

これは，いわゆる魂の生まれ変わりという意味ではなく，我々の肉体が滅びて土に還った後にまたそこから新しい命が生まれてライフヒストリーが紡ぎ出される，そのプロセスを示しやすいのではないかという意味である．丁度，倒れた大木の幹から新しい杉の芽が生まれてくるように（図12）．

仏教と行動分析学には，現代社会においては多くの方が日常的直観で存在していると信じている「自由意志の存在を否定する」という共通点があり（渡辺・森山，2016），全く関係ないと思われていた二つの領域の接点を見出そうする試みがある．いずれはこの曼荼羅という切り口からも仏教と行動分析学について論じてみたいと考えている．

7．おわりに　―地に足を付けた実践を行うことの重要性―

山脇（2018）によれば，公共哲学としての実践的な統合知というのは，以下の３つのレベルから成っているという．第１のレベルは，様々な現場での現状を分析しそこで起こっている課題について認識するレベルである．これは「私たちは何を知らなければならないのか」という問いかけに対する答えを模索するレベルである．

第２のレベルは，ヴィジョンと規範ないし価値論というレベルであり，良き公正な社会がどのようなものかをめぐるヴィジョンとそのための公共的価値について論じることを指す．これは「私たちはあるべき，または，そうありたい社会をどのように考えるのか」という問いに対する答えを模索するレベルである．

第３のレベルは，政策論で，上記のような公正な社会を実現するためにどのような政策や制度設計が可能かについて論考することである．これは「私たちは良き公正な社会の実現に向けて何ができるのか」という問いの答えを模索するレベルである．

「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」をこの３つのレベルに当てはてはめてみると，次のように位置付けられよう．

第１のレベル：人々の間に起きているお互いに対する無理解，それがもたらす大小さまざまな衝突―日常的な人間関係から，国際的な紛争に至るまで[5]―が起きている現状があること．

第２のレベル：個人対個人が，ひいては国と国，民族と民族とがお互いの過去の履歴（ヒストリー）をまず知り，理解することから相手を理解できるような社会の構築をすること．

第３のレベル：そのための実際の一つの策として，他者の理解（及び自己の理解）を丁寧に行うことを目的としたライフヒストリー曼荼羅ワークショップの実践があること．

これまで世界中で様々な領域で膨大な研究がなされ，それらの研究から導かれている膨大な知見があるにも関わらず，諍いや紛争が絶えないのはなぜだろうか．それは，机上の空論ではなく，本当に日々出会う人々と次のことが体現できていないことがその理由ではないかと筆者は考えている．

今，自分の目の前に居る人のことを，その人のヒストリーから理解できているだろうか

これは，まさに「今」起きている事象に誠実に向き合うことに他ならない．本ワークショップが，このことを実現するための地に足を付けた，すなわち「今とどう向き合うか」に気づく一つのきっかけになることを今後も検証しつつ実践を続けていきたいと考える．

註

[1] プログラムデザイン曼荼羅は，元々の開発者である，中野（2003）は「プログラム・デザイン・マンダラ」と表記しており，ワークショップの企画立案

のためのツールである．

[2] 2018年度までの間に，「自分のヒストリーを語ることには躊躇いがある」ということで，全学生のうち2名が個人作業を行わずその時間に他の作業を行った．うち1名は本原稿の校正を行っている最中の2019年1月の授業を受講していたが，その学生は小グループには参加し最後の省察のところで他の人の人生を興味を持って聴く重要性について自ら手を挙げて述べてくれた．自らの人生を語ることへの躊躇いがある場合には，その躊躇いを大事にすること，参加者の様子に応じた臨機応変な対応が肝要である．

[3] 随伴性とは，坂上（2014）によれば「刺激や反応の諸事象間の時間的，確率的関係をいう．時間的関係は，事象間の時間的配置と時間間隔を，確率的関係は，事象間での条件確率をいう」というものである．

[4] インターネット会議システムZoomについては，奥村絵里（2018）「世界一わかりやすいZoomマスター養成講座」などを参照のこと．

[5] これについては，山脇の言葉を借りれば，身近な人々同士というミクロレベルの平和，組織のというメゾレベルの平和，国内，国家間，世界平和といったマクロレベルの平和という多層に渡る（星槎大学大学院教育実践研究科主催のFD研修会話題提供の発表（2018年11月14日）より）．

謝辞

本稿を執筆するにあたって多大なご助言をいただきました，星槎大学大学院教授・東京大学名誉教授の山脇直司先生，曼荼羅図の開発者でありライフヒストリー曼荼羅ワークショップの実践者としてご指導いただきました，東京工業大学教授の中野民夫先生，そして，本稿執筆の機会を与えてくださり，行動分析学の道を歩む私をいつも暖かく支え助けてくださっています，慶應義塾大学教授の坂上貴之先生に深謝致します．

文献

ビジュー，S. W. & ベアー，D. M.（1972）．子どもの発達におけるオペラント行動．山口薫・東正（訳），日本文化科学社．

中部地域大学グループ・東海Aチーム（2014）．アクティブラーニング失敗事例ハンドブック（文部科学省「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化　平成26年度東海A（教育力）チーム成果物）．一粒書房．

フランク，A.（2002）．傷ついた物語の語り手--身体・病い・倫理-- 鈴木智之（訳），

ゆるみ出版.
萩原秀樹（2014）.「生と死の日本語教育」の実践．桜美林言語教育論叢，*10*, 87–102.
金馬国靖（2018）．教育課程総論シラバス（2018 年度）．横浜国立大学教育学部.
三田地真実（2012）.『共生』は目の前の人を真に理解するところから--ライフヒストリー曼荼羅図を描く・聴くことの意味--．星槎大学共生科学研究会（編）共生科学研究序説（pp. 101–121），なでしこ出版.
三田地真実（2013）.『ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ』の理論基盤構築に向けて--本ワークショップにおける「ライフヒストリー」の意味とツールとしての『曼荼羅図』--（研究ノート）．共生科学研究（星槎大学紀要），*9*, 162–174.
三田地真実（2014）．ライフヒストリー曼荼羅ワークショップによる他者理解促進の試み--大学生と教員の結果の比較から--(研究ノート)．共生科学，*5*, 53–66.
三田地真実（2017）．ファシリテーターを対象としたライフヒストリー曼荼羅ワークショップ．日本共生科学会第 9 回八王子大会抄録，48–51.
三田地真実（2018）．ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」の基礎的研究--ライフヒストリー曼荼羅図と年表型を使った場合の比較検討--．日本共生科学会第 10 回横浜大会抄録，32–35.
三田地真実・中野民夫・成田喜一郎（2015）．ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」の理論基盤構築に向けて（その 2)--海外で実践したワークショップから得られたいくつかの示唆--(研究ノート)．共生科学研究（星槎大学紀要），*10*, 145–157.
Mitachi, M., Yamamoto, O., & Nakano, T.(2016). “Life-History Mandala” Workshop (2): to understand one’s dialogical self and other people dialogical selves along with each unique life history (Workshop). The Ninth International Conference on the Dialogical Self (7–10 September 2016), The John Paul II Catholic Univerity of Lublin, Lublin, Poland.
Mitachi, M., Yamamoto, O., & Sato, T. (2018). “Life-History Mandala” Workshop (3): Finding & sharing your “meta I-positon” with others through the revised Mandala chart(Workshop). The Tenth International Conference on the Dialogical Self(13–16 June 2018), University of Minho, Braga, Portugal.
中野民夫（2003）．ファシリテーション革命．岩波アクティブ新書.
中野民夫（2017）．美しい時間--自分をふりかえり，お互いのありのままを聴き合えるとき--．看護管理，*27*(*1*)，80–83.
中野民夫（監修）三田地真実（2013）．ファシリテーター行動指南書-- 意味ある場づくりのために--．ナカニシヤ出版.
成田喜一郎（2017）．先生のための「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」の

ススメ．学校図書館，*801*, 69–71.
成田喜一郎・三田地真実（2010）.「ライフヒストリー曼荼羅図」ワークショップ，「教師のキャリア支援と持続可能な学校文化の構築」セッション資料（「学校マネジメントリーダー塾」），（2010/3/29，東京学芸大学）
成田喜一郎・三田地真実（2011）．ライフヒストリー曼荼羅図でふり返る自分史--お互いのストーリーを傾聴し合う大事さ--（ワークショップ），ホリスティック教育研究大会 2011（東京）.
オドノヒュー，W. & ファーガソン，K. E.（2005）．スキナーの心理学--応用行動分析学（ABA）の誕生--．佐久間徹（監訳），二瓶社.
坂上貴之（2014）.「看護すること（nursing）」を支援する学としての行動分析学．看護研究，*47*(*6*)，506–520.
島宗理（2000）．パフォーマンス・マネジメント--問題解決のための行動分析学--．米田出版.
立川泰史（2014）．表現とヒストリー・トークで深める鑑賞能力の考察--ナラティヴ・アプローチに着目した図画工作科の実践から--．美術教育学（美術教育学会誌），*35*, 327–339.
渡辺修宏・森山哲美（2016）．徹底的行動主義は仏教から何を学ぶべきなのか？立命館文學，*646*, 501–492.
山脇直司（2018）．教養教育における公共哲学の統合的役割--シュライエルマッハー的アプローチ--．山脇直司（編）教養教育と統合知（pp. 121–135）東京大学出版会.